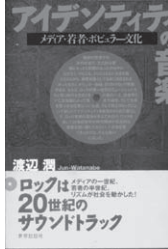


アイデンティティの音楽——メディア・若者・ポピュラー文化

(世界思想社, 2000年)



南 田 勝 也

大学を出たあと定職にも就かずぶらぶらしていた私が大学院に進学しようと決めたのは、あるとき立ち寄った本屋でサイモン・フリスの『サウンドの力』(晶文社)に出会ったからだ。それまで私はロックミュージックが学問の対象になると思っていなかった。大学の卒論でフォークを中心としたプロテストソングの系譜をまとめたが、研究と呼べるほどのものでもないし、もう充分かと考えていた。ところがフリスの本の帯にはこう書いてあった。「私はこの本でロックを正当に扱おうと決心した」。そうして私は1995年に関西の大学院に進学した。さっそく日本ポピュラー音楽学会に入会して研究者たちと交流することになるのだが、ニューアカの名残か卑近な対象を学術的に論ずるスタンスが多いように感じられ、刺激はもらえたが不満もくすぶることとなった。商業音楽のポピュラリティを検討するのもいいが、もっと骨太な、体制批判を内包した、そのような音楽社会学には出会えないのか。

そんなとき、友人から追手門学院大学の教授でロック研究者がいると聞いた。大学紀要に何本か論文を寄稿していることを知り、さっそくそれらを取り寄せると、題名には「ロック音楽

と時代精神」とあった。その内容は、私が待ち望んでいたものだった。1950年代から1980年代までのロックと思想潮流の関係性の変容が英米研究者の紹介を交えてまとめられている。さらにメディア研究の視点から放送メディアや録音メディアの発展史をロック史と重ね合わせた論考や、より社会学的にイギリスのアートスクールとロック音楽創造の関係を解説した論考もあり、私は何度も繰り返しそれらを読んだ。それが『アイデンティティの音楽』の元となった渡辺潤先生の連作論文である。それまでロックについて書かれたものといえば、黄金の60年代という在りし日を懐かしむものか、もしくはロックという題材を利用して背景にある社会を嘆くものがほとんどだった。渡辺先生の視点は、根源に批判性を持ちながらも——それは「時代精神」という言葉をタイトルに用いたことから明らかである——学術的な客観性をベースに社会構造やメディア技術との関わり合いを社会的に展開するものであった。

その後、友人と渡辺先生の研究室を訪れる機会があった。音楽研究をしているのにポピュラー音楽学会に所属もせずにマイペース主義を貫く変わり者。ボブ・ディランの話をきっかけに

でもしようかと内心どきどきしながら研究室のドアをノックした私の眼前に現れた先生は、はたして想像通りの人物であった。風貌はヒッピーのよう……ではなく、神保町の古書店の店主のような、世間で何が起きていようが我関せずにとり喫茶店で珈琲をすすっているイメージ。しかし研究室には最新のマックと人間工学に基づいたディスプレイユニットが設置されていて、さながらSF映画のコックピットのようであり、風貌や研究内容との不釣り合いさに驚いたことも覚えている。先生は先端メディア研究者としての側面も持っていたのだから、本当は何も不思議なことではなかったのであるが。

ともあれ私は「ロック音楽と時代精神」の連作を自分の修士論文で参照した。直接的な言及よりも、ロックを研究してもいいんだという精神的影響がもっとも大きかったと言えるかもしれない。そして月日は流れ、『アイデンティティの音楽——メディア・若者・ポピュラー文化』が2000年の終わりに出版された。その間に先生は東京経済大学に転任し、山梨県の河口湖に移り住んでいた。なお、紀要論文から出版までに数年かかったことや大学を移ったことの経緯は、同書のあとがきに記されている。私は、自分の初単著の出版を控えていたので同書を新たに参考文献にはできなかったが、もちろん出版後すぐに読んだ。紀要の内容と比べて幾分ノスタルジックな色調が濃くなったと感じたが、それも「仕掛け」のひとつなのだろう、と勝手に

に得心した。

タイトルに従って、これはある人物（たち）のアイデンティティ論として読むべきである。アイデンティティとは、自分が何者かを模索したうえで多様な可能態のなかから何かを選択したすえに達成される自己イメージであり、青年期にそのプロセスをたどる。本場のロックがもっともエネルギーを放っていた時代に青年期を経験したことの衝撃は想像に難しくなく、だからこそ語れる事柄というものがある。本書では、個々の事例もそうだが、一節を割いてミメシスの議論をしていることに注目した。ミメシスは美学の中核となる理論だが、音楽美や芸術美の本質を探るこの議論は、音楽に深く熱中した経験があり、熱中の理由を探求したいという情熱が生じてはじめてたどり着く関心である。

私は本書を読んで、自分自身のアイデンティティと向き合わなければならないと感じた。1969年に二十歳だった渡辺先生がロック最盛期を出発点とするのであれば、1987年に二十歳だった自分の出発点はインディパンクであり、しかも洋邦が入り交じったロックである。日本のことを書かなければならない。私はボブ・ディランの「我が道を往く」を連想した。同曲の原題は「Most Likely You Go Your Way And I'll Go Mine」、俺は俺の道を往くからお前はお前の道を往け。渡辺先生にそう言われた気がした。